

草間彌生「赤かぼちゃ」



高松港を出た高速艇は、勢いよく水を蹴って進む。大小の船が行き交う瀬戸内海。帆を立てた漁船も浮かぶ。外洋と違って揺れは少なく、あくまでも穏やかな船旅だ。

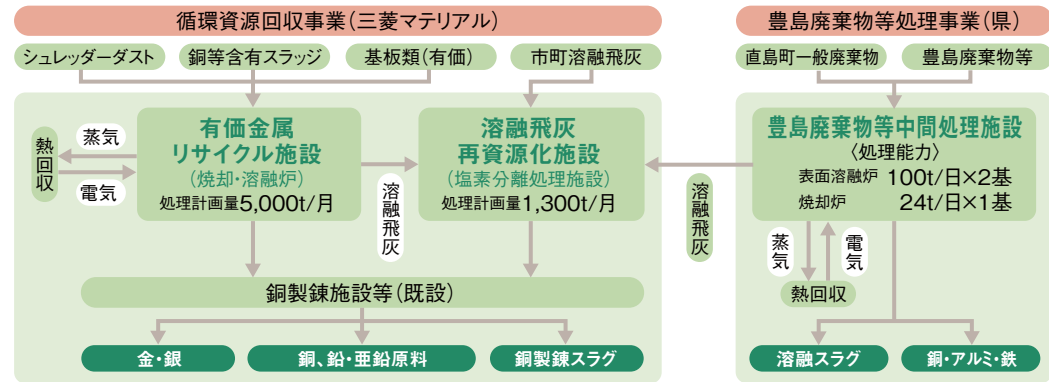
両側には、島影が絶えることなく続く。白っぽい花崗岩に、黒松の生えた島々である。その一つの突堤に、赤く丸いものが現れた。直島の象徴という赤いかぼちゃのオブジェだろうか。背後には瓦屋根の家々、緑の茂り、赤と白の鉄塔も。

防波堤を回り込み、船は停まる。晴れた空の下、ガラス張りの建物が眩しい。「海の駅なおしま」。高松市より北へ高速艇で二十五分、香川県直島町の玄関口だ。

環境と芸術の島、

循環型社会モデル
瀬戸内・直島を行く

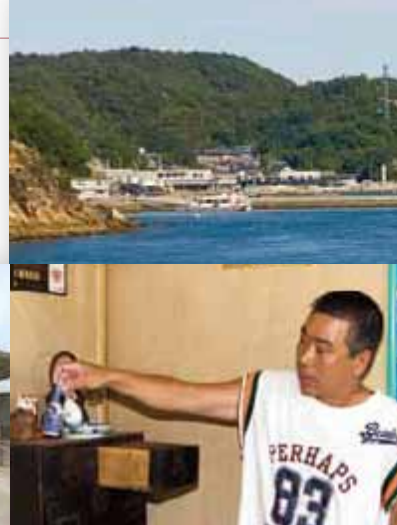
エコアイランドなおしまプラン ハード事業のリサイクルフロー図



©香川県



てしま
豊島に堆積する60万トンを超える廃棄物を、海上輸送で直島へ運び、直島町の一般廃棄物とともに焼却・溶融を行う中間処理施設「香川県直島環境センター」(写真左)。(写真左)。いわば、ごみをきれいなスラグ(粒)に変える。廃棄物を運ぶコンテナトラックも、環境センターの建物も、美しい瀬戸内海の環境回復をイメージさせる、「海の青」を基調としたデザインだ。同センター次長の佐々木幸浩さん(写真上)に話を聞いた。



▶地だこがたっぷり入った「たこ飯」

◀骨董好きの店主に、昭和の頃の島の話聞く。江戸時代は天領として、大正以降は企業城下町として栄えてきた豊かさを感じる



周囲十六キロの島に映画館

港の向かい側、直島産・地だこ入りとある看板にひかれて、食堂を覗く。店の隅には、つや光りする漆塗りの箆筥。抽斗の中に、小さな徳利があった。

「御神酒徳利。護王神社から出てきたものよ」。日焼けした店の主が、島にあるお宮さんの名を言う。他にも古伊万里の器、切り子硝子と、いろいろととり出して「こういうのを代々持っている家が、島にあるんよ」「この硝子は昭和の中期かな。その頃豊かだったから。人口あたりのテレビの普及率なんか、いちばんとか聞いたよ。白黒テレビの頃だけど」

直島の豊かさについての逸話は、あちこちで耳にする。いわく、お酒の消費量がこのあたりでいちばん多かった。映画館やスーパーがいち早くでき、流行の最先端をいていた。周囲十六キロの島に映画館とは、映画の全盛期でも、めずらしかっただろう。

負の遺産からのエコタウン事業

古くより水上交通の要衝であったここは、江戸時代は天領として栄え、海運や製塩で富を蓄積。大正初期に三菱合資会社(現マテリアル)が銅製錬所を設け、以来二十世紀のほとんども、企業城下町として歩んできた。

そして二十一世紀、島の歴史に新たな頁が付け加わった。

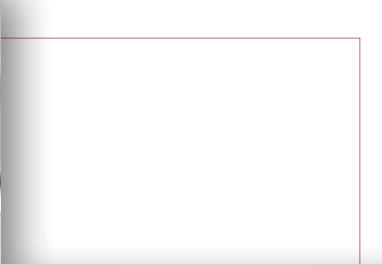
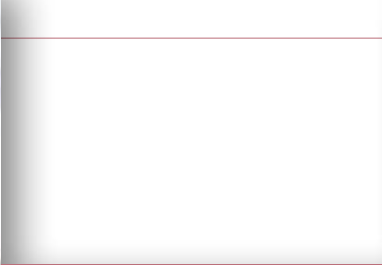
た。循環型社会のモデルをめざす「エコアイランドなおしまプラン」(以下、なおしまプラン)だ。香川県と直島町が策定、国が認証するエコタウン事業として、二〇〇二年に、島嶼部では初の認証を受けた。

きっかけは、負の遺産からである。一九八〇年代から九〇年にかけて、近くの豊島で産業廃棄物の不法投棄が行われ、後には汚染された環境と、六十万トンを超えるごみが残された。大量生産、大量消費、大量廃棄の経済優先社会の行き着く果てとして報じるニュース映像を、私も覚えている。無惨な豊島のありさまは、これからはいかにして廃棄物を出さないか、出されたものはいかにして再生利用するかを考えなければならないと、見るものに告げていた。

美しかった豊島を元の姿に戻す。のみならず、取り除いたごみを、どこかよそへ埋め立てるのではなく、リサイクルしなければならぬ。その候補地の一つとして、三菱合資会社の頃からのインフラを備えた、直島が選ばれた。

自分が捨てたのでもないごみを持ち込まれるのは、誰だって抵抗があるだろう。が、直島町は最終的には受入を決定した。そうしてつくられたのが、県の環境センター中間処理施設だ。なおしまプランのハード事業の関連施設である。

島の北部、三菱マテリアルの敷地内に整備された、海の青さを思わせる建物。ここで県による豊島廃棄物の処理事業が行われている。



自動車や廃家電等のシュレッダーダストや基板類などを焼却溶融し、可燃物や塩素等を除去する、三菱マテリアル直島製錬所の「有価金属リサイクル施設」(写真下)。焼却溶融後のスラグメタルは銅製錬施設でリサイクル処理され、銅をはじめとする有価金属が回収される。181万㎡の広大な敷地内に点在する施設を、所長の清水隆さん(写真左)の案内で回る。



▲直島環境センターの回転式表面溶融炉の模型を動かしてもらいながら説明を聞く(写真上・中段)。搬入された廃棄物はクレーンで前処理工程に送られ、溶融処理後はスラグとなり、なかには皿やカップに生まれ変わるものも

豊島の廃棄物と直島で出るごみとを前処理(破碎)して、溶融炉に入れる。一般の焼却炉より高温の約一三〇〇℃で処理することで、ダイオキシン類はほぼ完全に分解される。灰が溶けたものは水に落とされ固まって、スラグと呼ばれる粒になる。スラグはさらに細かく破碎し、含まれる銅やアルミを回収・再資源化したのち、残ったスラグは、安全性を確認した上、砂の代わりにセメントに入れる。そうしてつくられたブロックや側溝が、県の公共事業に使われている。海の砂の採掘を抑え、自然を守ることもつながる。

センターには、手びねりの皿やカップが展示してあった。「なおしまスラグ体験工房」の作品だ。スラグはガラス質なので、粘土に混ぜて焼くと、釉薬(ゆうやく)をかけたような仕上がりになる。投棄されたままでは、ふれることさえためられるだろう廃棄物が、食器にまで生まれ変わるのだ。

体験工房は、なおしまプランのソフト事業の一つ。ハードとソフトが、車の両輪の関係で、プランを推進しているのを実感する。

廃棄物という「都市鉱山」

循環型社会への転換という時代の要請に、三菱マテリアルもまた、いち早く応えてきた。もともと同社は、銅の製錬を主とし、原料に含まれる金・銀・白金・パラジウム等の回収、製品化にも、世界的にも優れた技術を有



ベネッセハウス ミュージアム
撮影:山本 糾



都会の喧噪から離れ、心にも身体にも元気を与え、安らぎを感じさせる直島の環境のなかで、人間が真に「よく生きる」(＝ラテン語の造語でベネッセ)とは何かを考える場所をつくりたい——との思いからスタートした、直島を舞台に展開するアート活動「ベネッセアートサイト直島」。ベネッセハウス ミュージアムカフェで、広報担当の池田良子さん(写真上)に話を聞く。



▲世界各地の水平線の写真と瀬戸内の水平線が一体化して見える、杉本博司「タイム・エクスポーズド」 撮影:安斎重男



三菱マテリアル直島製錬所の「熔融飛灰再資源化施設」(写真上)。有価金属リサイクル施設や隣接する直島環境センター、さらに島内外の一般廃棄物焼却熔融炉から出る飛灰を、銅製錬施設でリサイクルするための前処理を行う。また銅製錬の工程で出る金銀スライムは貴金属製錬に回され、眩いばかりの金塊や銀塊となる。銅精鉱1t中、金は約15g、銀はその10倍程度含まれているそうで、まさに廃棄物は「都市鉱山」だと実感する。



▲製錬工程を経て、できあがった銅の地金

している。

使用済みの携帯電話、パソコン、家電、自動車のシュレッダーダストが増え、リサイクルが課題となったとき、有価金属を含むそれらを同社は「都市鉱山」ととらえ、すでに持つ銅製錬施設を使つての再資源化にとり組んだ。そして近年、新たに二つの施設が加わった。廃棄物を約一二〇〇℃で焼却熔融し、製錬施設に入れられるようにする、有価金属リサイクル施設。炉から出た飛灰の中の金属回収の前処理を行う、熔融飛灰再資源化施設。県の中間処理施設の熔融炉の飛灰も、ここへ送られる。従来なら、最終的には埋め立てるしかなかった分も、リサイクルされるようになった。ゼロエミッションリサイクル。廃棄物を原料とし、廃棄物を出さない資源化だ。なおしまプランのハード事業の中心部を、同社は担う。

展示してある金の延べ棒に、さわってみた。燦然と輝くの中に、廃棄物に由来する金も入っているのか。ごみから金へ。夢のようなことを可能にした、着想と技術力に驚嘆する。

島つつじの花と男の子を車体に描いた小型のバスが、敷地内に入ってきた。町営バスの「すなおくん」だ。情報公開と啓発のための見学ツアーを、町では組んでいるという。

山間のひまわり畑の脇を「すなおくん」が走る。休耕田にひまわりを植え、種から油をつくるとともに、廃食用油を回収しバイオ燃料にする「環の里創生プロジェクト」。なおしまプランのソフト事業の一つだそうだ。

ここにしかないアート

道はやがて、波が静かにうち寄せる浜へ出る。まさしく白砂青松の風景だ。島の南部は、国立公園となっている。芸術の島として、直島の名を世界に広めた、ベネッセアートサイトの活動は、一九八九年、岡山に本社のある福武書店(当時)が、この地に文化村構想をうち立てたことから始まる。

コンクリート打ちっ放しのミュージアムに展示されているのは、現代アート。舟を描いた絵の前の床には、舟のオブジェ。振り向くと窓の向こうの海岸にも、舟が繫留してある。水平線の写真を、一列に並べたテラスへ立てば、瀬戸内海の水平線と、一つにつながる――。

九六年以降は、ミュージアムと同じ建物にあるホテルにアーティストが滞在し、直島の時間と空間に身を置いてつくり上げる、サイトスペシフィック・ワーク、ここにしかない作品制作へと方針を転換。その発展形として、美術館内にとどまらず、島の中部の本村でも、家プロジェクトが行われている。人が住まなくなり、そのままでは朽ちてしまう民家を、アーティストが作品化し、新たな命をふき込むのだ。高齢化や企業の合理化で町の人口はピーク時の半分以下にまで減り、三千四百人を割っている。

宮島達男氏の作品「角屋」は、二百年ほど前の家を、修復した上で、室内に水を張り、灯を沈めた。

作品ではない家も、白漆喰に黒い焼板の壁、瓦屋根と



「ベネッセアートサイト直島」の一環として、島内でも古い街並みが残る本村地区では「家プロジェクト」が展開されている。地域の中で長く暮らしが営まれ、現在は空き家になった民家を、積み重なった時間や記憶も取り込みながらアーティストが作品化。島の信仰の中心となる神社さえも作品化され、地元の古老がスタッフとして関わるなど、地域の中にしっかり根づいている。



◀「護王神社」杉本博司
"Appropriate Proportion"
撮影:杉本博司



▲「角屋」宮島達男 "Sea of Time '98" 撮影:上野則宏

いう昔ふうの様式が、意外なほど保たれている。路地は掃き清められ、塵ひとつない。よそから来る人に鑑賞されることで、町の人も価値を再発見するとともに、環境美化につとめるようになったのか。

護王神社も、家プロジェクトの作品となっていた。本殿前に白い玉石を敷き詰め、ガラスの階段が架けられている。スタッフの男性によれば、本殿は五百年前に建てられたが、現在のものは、杉本博司氏の作品、地下に石室も設けられ、入ることができるという。古い御神酒徳利が、港近くの食堂にあったのも、そのときに掘り出されたのだろうか。

江戸時代からのお宮さんまで作品化されることに抵抗はなかったのだろうか、この町の生まれという、七十七歳のスタッフに問えば、首を横に振り「ちょうど修理せんといかんところやったので、氏子さんたちと話し合って、やってもらおうかと」。階段がガラスであることについても、「ありふれた石より、かえってええんやないでしょうか」。観光客が抱くかもしれない違和感を、先回りして擁護する懸命さには、胸打たれると同時に、腑に落ちるものがあった。

私はずっと不思議だった。環境への取り組みと芸術で知られる島。どちらも、きっかけは島の外から来た。それらを受け入れる、この町の寛容性は、何なのかと。

答えの一つは、歴史かもしれない。天領として企業城下町として、栄えてきた豊かさ、暮らしの安定が、人の



安土桃山時代の名建築「飛雲閣」をモチーフにした直島町役場の前で、町のエコアイランドなおしまプラン担当・前田浩作さんと。



岸本 葉子 きしもと ようこ
1961年神奈川県生まれ。東京大学教養学部卒。保険会社勤務後、中国留学。帰国後、旅や日常生活を綴ったエッセイを発表。ひとりの気楽さ、心地よさを大切にするマイペースな暮らしぶりは多くの読者の共感を得ている。著書『はたらくわたし』『自問自答』『ゆる気持ちいい暮らし術』『女の旅じたく』『ちょっと古びたものが好き』『暮らしとごはん』『がんから始まる』『微熱の島 台湾』など。
<http://kishimoto-fan.jugem.jp/>

心にゆとりを生んだ。加えて、古くより水上交通の要衝であったここは、外の文化や価値観に接する機会が多かった。島の郷土芸能、女文楽も、もともとは上方から入ってきた文楽を、担い手の男を失ったため、形を変えて継承したものだ。受け入れるだけでなく、固有の特色を付与して、育てる力が、昔から培われてきたのだろう。

考えてみれば直島は、日本の縮図ともいえる。工業と観光開発が経済を牽引し、やがて企業に社会貢献、地域との共生という課題が求められ、さらに世の中全体が、循環型社会への転換を迫られるに至り、なおしまプランという形でそれらを統合。環境産業という産業と雇用を創出し、町の活性化を図るとともに、ソフト事業において、自分たちらしさをうち出してきた。その懐の深さと視野の広さに、学ぶべきものは多い。小さな島の発する、大きなメッセージである。

翠